

「今こそ待望の時」

マタイによる福音書 25章 1節～13節

説教 本庄侑子牧師

アドヴェント第一の聖日を迎えました。アドヴェントの期間、私たちは二つの到来のできごとについて思い巡らします。一つはクリスマス。すでに来て下さったイエス様。もう一つはやがて来て下さるイエス様。イエス様の再臨です。

クリスマスの夜、この地上に生まれてくださったイエス様は、その救いを完成させてくださるために、もう一度来てくださいます。最初の人々は、イエス様の劇的なできごとを、わずか3年の間に目の当たりにして生きてきました。ですから、すぐにでもイエス様が来てくださると思って待っていたのです。しかし、なかなか来られない。世の中には悪しき力が満ちていきます。イエス様は来ない。だったら、自分のしたいことをして死んだ方がいいではないかという人たちや、日々を虚しく生きる人たちも現れました。

時代に隔たりはありますが、私たちもそうではないでしょうか？ 私たちなりに、自分には何ができるのだろうか？と生きて生きようとしません。しかし、あまりにも待つ期間が長く、何も変わらないと、自分を責めたり、誰かを責めたりしたくなるのではないのでしょうか。

マタイによる福音書は、そうして刹那的に生きようとした人々、様々なことに希望を抱けず、諦めて生きていた人々に対して記されたものです。クリスマスの夜、神の御子イエス様は、確かにこの地に生まれてくださった。そして、神様のご計画は今も続いていて、完成に向かって前進しているのだ、と。

その後も、教会は、アドヴェントから一年を始めてきました。一年の初めに、人間が行うことがすべてではないということに目を向けられさせられてきたのです。私たちの行いが不十分であっても、途中で頓挫したように思えても、神様は天から手を伸ばすようにして、ご自身のみわざを完成させてくださるのです。

キリストの再臨を信じるが故に、与えられる生き方があります。今日の聖書の箇所には十人のおとめが出てきます。聖書において、イエス様は花婿であり、教会は花嫁としてたとえられます。終わりの日、イエス様が教会を迎えに来て、婚姻の祝宴がもうけられます。今は婚約期間を過ごしているといえるでしょう。当時の結婚式は、花婿が町の家々に挨拶をして回った後、花嫁を迎えに来て前祝いを行い、その後、花婿

の家に集って本祝いが始まる、という習慣がありました。今日の聖書箇所は、花嫁の家に来るはずの花婿の到着が遅れるという場面です。

十人のおとめたちには、思慮深い女と思慮の浅い女がおりました。思慮深い女5人は、油を用意していました。しかし、他の女5人は用意していませんでした。夜になると足元を照らす必要があるという、目の前のことにのみ、心が向いていたのでしょう。10人全員が「寝てしまった。」(5節)ののですが、そのことが、思慮深い女と思慮浅い女とを分けたものではありません。「目を覚ましていなさい。」(13節)は、眠くても起きていなさい、という意味の言葉ではないのです。

さて、5人の女が持っていて、他の5人が持っていなかった油とは何でしょう。この油は、他の人から分けてもらえない物であったようです。自分がこうなったのは、他の人が分けてくれなかったからだ、とは言えなかったのです。それは、今日の生き方を周囲のせいにはできない、ということではないのでしょうか。言い換えれば、過去の何かや誰かによって、自分の人生を決めさせなくていい、ということです。憎しみ、仕返しをするために今日を生きなくていい。私たちの今日を導くのは、主イエスの愛と恵みだからです。

「悔い改めよ。天国は近づいた。」(4章17節)それが、イエス様の第一声でした。そして、弟子を選んで、「わたしについてきなさい。あなたがたを、人間をとる漁師にしてあげよう。」(4章19節)と言われました。イエス様は、この人、あの人を、神様が独り子を与えるほどに愛し、赦しておられる人として見いだす歩みへと招いておられます。

この世の歩みの中で、努力や善意が踏みにじられることも多くありましょう。しかし、もう、刹那的に、無気力に生きる必要はないのです。天から完成が与えられるのです。私たちは、その約束のもと、人間をとる漁師にされて行くのです。イエス様は今も、深い闇の中にいる私たちに、「目を覚ましていなさい。わたしについてきなさい。」と語りかけておられます。私たちの人生を導き、完成させてくださるのは、そんなイエス様の愛と恵みです。

(記 説教要約奉仕者)